

バーサーカーになったら会話が出来なくなっただがw

きらきら

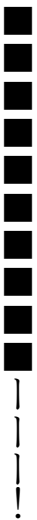
【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何やかんやで転生したオリ主が、失った未来を取り戻す為に奮闘する物語



(特別意識 : ガチャ回させろよWWW)

目次

DQN死すべし慈悲はない	1
話聞かない系女神ってマジ女神	4
俺たちの物語はこれからだ！↑なおボツチ	8
邂逅	12
頭のおかしいパーティー+バーサーカー	21
冒険者登録	31

DQN死すべし慈悲はない

イヤツフオオっおおお!! ついにこの時が来ちゃいましたよww
ぐだぐだイベ礼装狙いで呼符回してたらヘラ来るとかww ついに
宝具レベル5になったぞいww いやマジで長い道のりだったわ
ww

画面に映し出される宝具レベルアップと効果音と共にその下にある
Level5という表記を食い入るように見る。

いやまさかここで来ちゃいますかww HF公開記念で宝具レベ
ル2から4まで上げれたがそこから地獄になったなw まさか2ヶ
月分の給与の使うとかw それでも出ないガチャはマジで糞すぎる
w 何でだよ? 黒王はとっくに宝具レベルマになってひたすらレア
プリになっていくのにどうしてヘラが出ねえんだよ? おいピツク
アップさんマジで仕事しろ(恫喝)。クラス別とかは地雷臭がしすぎ
たから安定のスルーをして次回のピツクアップ待ちの姿勢に入っ
たんだがw

駅のホームで楽しい楽しい社畜ライフへと誘う電車お迎えを待ちながら
イベ礼装が出たらいいなあと思いつつながら単発を回す。金色の光。「ん
?」クラスはバーサーカー。「んんん?」ヘラクレス召喚。「ヨツシャ
アアアアツ!!」↑今ここ。

突然騒ぎ始めた自分を周りの人は迷惑そうに見てくる。髪を金髪
に染めたイキリキッズDQNが睨んでくる。おおっと興奮しすぎたよう
でおじやる。取り敢えず頭をサーセンwと胸の中で言いながら下げる。
そんな些事よりもバーサーカーである。聖杯入れてレベルは100
で当然スキルマ。星4フオウもイベの時と毎月のレアプリ交換でコ
ツコツ手に入れてカンストして、今日ついに宝具レベル5になった。
残りは絆レベル上げで現在12であり15まで目指すだけである(最
終試練)。

フハハハハッ! うちのバーヘラサークラカーレスは最強なんだ!(雁夜おじさん
感)

やっぱヘラクレスってカッコ良すぎますわw SNでも全裸王ゴージャスな変態相手にイリヤをずつと守りながら戦うとかマジでパネエつす。しかも己が神話を乗り越えるとかガチで鳥肌立ちました。何も出来なかった正義くんは黙ってて下さいねーw

劇場版HF2章でもセイバー戦マジでヤバかったつす。もうなんつーかド派手でした。語彙力なくてサーセンw つか腹ペコ王強くな？青から黒にイメチェンしただけで何であんなに強いのか？あつ、ハンバーガーのせいかな…(悟り)【悲報】正義マンくん、黒聖杯にマイ鯖を寝取られてたw

1章の怪人青タイツケルトのワンちゃんとハサン先生より演出は派手だったと思います(当社比比べ)なお1章では毎回の如くする正義の味方チャーとランサーの戦闘はカットされた模様。是非もないヨネ！良かったね正義くん！死ぬとこダイジエストカッされてたよw

共通ルートで毎回やってるしオマエ等も飽きてるよなw w

そんな事より何でもかんでも責任押し付けられるガス会社さんはそろそろ聖堂教会と魔術協会を訴えてもいいと思います。これマジで。

警笛が鳴る。

おつ。そろそろ電車来るか。この通り過ぎていく次の電車がお迎えだな。

アーラシュパイ先あざしたw 後はス圧パ制ル者タクキスチとフレ頼光が何とかします。アーラシュパイ先がいつも通り爆散してキラキラになると、

ドンッ。

「サーセンw」

と肩をぶつけてきたニヤケ面のキッズAがこちらをヘラヘラしながら笑ってくる。後ろのキッズB&Cもニヤニヤしている。殴りたいいこの笑顔(ニッコリ)

そんな事より衝撃でスマホが手からすっぽ抜ける。

ノオオオオオッ！スマホケースをコ○バースのしたら滑り止めなくてツルツルで滑りやすいんだよ！

線路に落ちるスマホ。咄嗟にルパンダイブする。スマホは：ギヤアアアア！画面割れてるうう！？あ、でも操作出来るなこれ。スパルタクスに宝具撃ってもらってと。

「おいーさっさと上がれー！」

るっせえな。俺の周回の邪魔すんじゃないやねえっつーの。頼光さん出番です。サクッと殺っちやて下さい。

「もう電車が!？」

るっせえな。ガタガタガタガタ：ってこれ電車の音か。ん？左には電車が：ってアレ？何か車掌さんめっちゃ慌ててね？つか俺ちゃん線路の上にいるじゃん。

電車と○○の距離13m

つーか周りがゆっくりしてる中で何でこんな普通で俺ちゃん考えてんの？え、走馬灯ってやつ？

電車と○○の距離9m

まさかの俺ちゃん終了のお知らせww

オワタww＼(^o^)/

ってふざけんなし！こちらら水着沖田さんの実装待ってるんだよ！今年されるって噂されてるんだよ！つかぐだぐだイベの続き気になるんだけど！本当にファイナルなの!？

電車と○○の距離4m

ってもう無理か…。なら最後に…

DQN死ねっ!!くたばれっ!!fuck yo…

電車と○○の距離0m

グシャッ!!

中指を立てた右腕が宙を舞った

話聞かない系女神ってマジ女神

ハッ。此処は一体？気が付けば周りが暗く何処までも広がっているところにポツンと椅子に座っていた。

あ：ありのまま今起こった事を話すぜ！「俺ちゃんは電車に轢かれたと思っただけのまにか妙な場所にいた」な：何を言っているかわからねーと思うがおれも何をされたのかわからなかった：頭がどうにかなりそうだった：催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ：

「○○さん。ようこそ死後の世界へ。」

後ろから声が聞こえて来る。かつかつと足音が響く。

「あなたはつい先程不幸にも亡くなりました。」

そして自分の前の椅子に如何にもTHE女神と言った美貌の女性が座る。

「短い人生でしたが、あなたは死んだのです。」

そんな事より自分のiPhone知りませんか？

「……。私の名前は△△。日本において若くして死んだ人間を導く女神です。」

ねえねえ話聞いている？どっかのRPGの人の話を聞かずに勝手に話を進めてくキャラじゃないんだからさ、人の質問にはちゃんと答えようよ？

「…あなたのiPhoneはあなたの足下にあるじゃないですか？」

え？言われた通りに見てみるとそこには粉々になったiPhoneだったものがあった。

嘘だっ！（レナ感）

「いや最初から目に入っていましたよね？さっきガン見してましたよね？どんだけ認めたくなかったんですか？」

呆れてこちらを見る女神△△。もうやめて！○○のライフはもう

0よ!

ああ、アアアアアアアツ!!ふぎけるな!ふぎけるな!バカ野郎!
ウオー! (切嗣感)

データが!くっそ今までどんだけ課金してきたと思ってんだよ!?
それに金だけじゃない!アンリマユ宝具5にすんのにどんだけフレ
ポ回したんだと思ってんだよ!

(うわあ。ガチ泣きしていますね…。少し記憶を覗いて見ましよう
か。)

(ええ…。これはひどい…。とんでもない重課金厨じゃないです
か。給料から必要最低限の生活費を抜いた後は半分は実家に送って、
残りの半分は課金って…。仕事中でもAPが余りそうになったらする
とか…。それに毎朝感謝の100連ガチャって何ですか意味がわか
りませんしわかりたくもありません。て言うかグー◯ルに勤めてた
んですか!驚きです。でも少し可哀想になってきましたね…。)

20分後、

「よしよし、大丈夫ですよ。ほら此処にはあなたを傷つけるものは
いませんよ。」

やだ……。いやだよ……。こんなひどい……。あんまりだ……。うう
……。かえして……。かえしてよ……。グスッ。

(まさか大人の頭を撫でる日が来ようとは…。じんせい 神生わからないもの
ですね。…まあ嫌いじゃないですけど。うーん。どうすれば元気に
なってくれるでしょうか?そうだっ!この提案は喜んでくれるので
しようか!?)

この女神、アックア 前任から引き継いだばかりの経験の浅い若手女神であ
り、周囲からは有能だと期待されており実際にそうなのだが…実は相
手がダメ男であればあるほど尽くしてしまうという悪癖がある。そ
して○○が初めて導く人ということもあつて…

「落ち着きましたか?」

何だか頭がぼんやりして記憶が曖昧で…。iPhone、電車、D
QN……。うっ、頭が!まあこの女神様(一応)は何処か信頼できそうっ
ぽい。何故かわかる。(。D)ハッ!これがもしかして運命の出

「元氣な返事ですね。フフツ。」↑誰かこいつ止めてくれ

「○○さんの希望は規定により受託されました(されていません
脳筋ゴリ押しで:おおっと誰かが来たようだ)」

えっ何か気が付いたら身体宙に浮いていつてるんですけど?まさか無重力体験ができるとはw↑ようやく正気に戻った

「さあ勇者よ!願わくば数多の勇者候補たちの中からあなたが魔王を打ち倒すことを祈っています!さすれば神々からの贈り物として、何でも願いでも叶えて差し上げましょう!」

何でも!?!今何でもって言ったの!?!え!マジで!FGOの引き継ぎナンバースマホン中に入れてたから絶望だったのに戻ってくんの!?!つか今どゆ状況ww 取り敢えず魔王つてのぶっ殺せばいいのw?

一般ピーポに何求めてんだよw

:ヒュー!無重力で回転キメんのたーのしーw

→現実逃避

やっぱ何か気持ち悪くなってきたんだけど:。

「さあ旅立ちなさい!」

やべえマジで吐いていいすかw 無重力気持ち悪!

白い光に包まれて何も見えなくなつた。

りませんか？

そんな人にはこれ！そのただのカンペじゃんと思つた人！違うんですよねー。このカンペは何と！いくらめくつても尽きないんです！まさに無限！

しかもそれだけじゃないんです！このカンペは特殊な繊維で出来ており、付属のペンじゃないと汚れないんです！し、か、も！安心の不壊加工がされており、どれだけ雑に扱っても決して壊れません！馬鹿力で何でも壊しちゃう… そんなお悩みを持つ人でも安心して扱える設計になっております。

気になっちゃってきましたね？お次はペンの説明に移りましょう。この付属のペンは、お客様の魔力からインクを生成する機構で決して尽きることはありません。魔力も微小な量で増幅して増やしていくため、魔力量に自信のない御方も安心して使用できます。

文字を書くのが苦手…そんな人でも大丈夫！このペンには全自動筆記アシスト機能が搭載されており、書きたいと思つた内容が脳の電気信号を読み取る事により、ペンを握るだけで手が動きます。

そしてこのペンの一番の特徴はなんと！無くした際に戻つてこいと念じるだけでそこから文字通り飛んできます！まさにアク〇オ！です！

物をしよつちゆう無くしてしまう… ペンをついつい飛び道具として投げてしまう… そんな人もその悩みとは永久におさらば！画期的なペンです！

本商品は普段は霊体化しており、ユーザー登録をすることで、使い時に何時でも何処でも取り出して使える仕様となっております！どうぞこのカンペとペンを使って素敵な筆談ライフを楽しんでください！

p. s この商品の運送は安心安全迅速にがモットーの総合運送会社、アマゾネス・ドットコムが担当しています。アキレウス〇ね！

え？無駄に高性能すぎじゃね？（驚愕）

邂逅

「カズマ！今日こそはあの憎つくきカエル共をぎったんぎったんにするわよ！」

「いやお前前回ヌルヌルにされてんのにどっからそんな自信湧いてんの？馬鹿なの？さすが駄女神、学習しない。」

「むつきー！女神に対して何よその言い草は！ゴツトブロー食らわせるわよ！」

「カズマ！カズマ！早く行きましょう！私の爆裂魔法を撃ちたいという欲求が抑えられません！もうここで撃っていいですか！」

「だあー！お前は耳元で騒ぐなうるさい！倒れるならせめてカエルの何匹か吹っ飛ばしてから倒れるよ！今ここで撃つても絶対背負わねえからな！」

「おいカズマ、先程言った通りにもし私がカエル共に蹴られていようとも助けなくていいからな？アクアとめぐみんのフォローに徹していればいいからな？私は皆を守るクルセイダーだから身を挺してかばってそして…ああんっ！」

「黙れドMクルセイダー。」

「はあんっ！」

（チツ、何でクエストに行く前からこんなに疲れなきやいけないんだよ…。）

今回のターゲットであるジャイアントトードがいる平原を目指して森の中を進んで行く一行。

「あれ？」

「どうしためぐみん？急に立ち止まって？トイレか？ならさつさとその茂みでもして来いよ。」

「紅魔族はトイレ何てしませんって前言ったでしょうが！？てかうら若き乙女に向かって茂みでトイレしろってあなた鬼ですか！」

先頭を歩いていためぐみんが止まった為に全員が足を止める。

「はいはい。紅魔族はトイレ何てしませんでしたね。トイレじゃな

「カズマ！カズマ！」

と誰かが呼ぶ声が聞こえる。そして、

「いい加減目開けなさいよ！」

「ぶふおっ！」

ゴットプロー
グーパンを食らった。

「痛ってえ！って俺、生きてる!？」

「何馬鹿な事言ってるのよ？」

そして視線を巨人に向けた先には、

『近くの街まで案内してください。』

と書かれたカンペがあった。

「……………は？」

頭のおかしいパーティー十バーサーカー

カエル潰してたらめっさお仲間さんが集まって来たんだがw
もう斧剣でグジュグジュすんの飽きてきたし殴ってみつかw
斧剣を適当に放り捨て、近くのカエルへと飛び込む。

HEY Y O U ! ハートキャッチしちゃうぞw

カエルの胸へと思いつきり拳を握って振り下ろす。

インパクトの衝撃は余す事なく、全てカエルの身体に吸い込まれて
一瞬動きを止めたあと、文字通り爆発した。

うっわ汚えw ちよっ、カエルの体液口ん中に入ったんだがw
ハートキャッチ(物理)できなかつたわw

てかこの身体、俺ちゃんって殴り合いの喧嘩もした事ない優等生い
い子ちゃんだったのに、何か戦闘慣れつつーか殴ろうとか思ったら身
体がスーって動くんだよなあ。

ほんと、いくらヘラの身体って言ったつて素人が殴る拳でカエルが
水風船を爆発させたみたいにならねえだろw

…ならねえよな?…でも剣圧だけで自動車吹っ飛んだり、道路が割
れてたりしたよな?…カエルくらい血煙にしてもおかしくなくね
?

まあそれは置いといて、もうホント身体が自動で動くつーか、ヘ
ラの経験値が活かされてるってみたいなんかねー?

よし! 考察終了! とりま残り潰すかw

って、え? なあにこれえ? 何か魔法陣ばいのに周り囲まれてるんで
すけど? しかもどんどん魔力? って感じの高まって来てるんですけ
ど! 何か猛烈に嫌な予感すんだがw 私知ってる! これってスキ
ルの心眼(偽) ってやつが反応してんだよね! はよ出ようつとw

魔法陣の中心から飛び退いた瞬間、空間が爆発した。

土埃がもうもうとする中、地面にふっ飛ばされて寝転がっていたが
直ぐ様はね起きた。

痛ってええええー! マジ痛えw w w 何かもうTNTとんだけ

「ふっ。わかったわ。この水の女神であるアクア様が導いてあげるわ！感謝しなさい！」

髪をかきあげながら勢いよく言うアクア。

ん？今女神って言わなかったか？やっぱ何かそこの少年とか口リイタと存在が違う気がするんだよなー。

：あーだからか。ヘラクレスって女神ヘラに人生狂わされてたからなー。そりゃ神様嫌いなどもあって、それが自分に引き継がれてたから嫌な感じしてたってそんなところかねー？ま、何かこの女神って頭軽そうだし適当におだてますかw

『さすがアクア様！美神！頼りになる！』

「ふふーん！あなた中々見どころあるじゃない！私の信者にしても構わないわよ！」

『あ、結構です。』

「何だよ!？」

信者になる事を執拗に迫られたが何とか振り切った俺ちゃん。

向こうではずっと目を瞑ったままの少年に頭の弱そうな女神がグーパンをしている。：何かあの女神ちよっと心配になってきたし少年にもカンペ見せるとしますか。

~~~~~

「いやー、本っ当に迷惑をかけてすいませんでしたアルケイデスさん！うちの馬鹿共が大変迷惑をかけて！」

『何、気にするな。』

「やだ！アルケイデスさんが漢前すぎて惚れそう。」

少年たち一行と近くのアクセルという街に向かう俺ちゃん。少年、いやカズマと、ヘラクレスの名前は有名すぎるので転生キッズに目をつけられるかもしれないのでヘラクレスの幼名だったアルケイデスと自己紹介をした後にカズマの連れを紹介してもらおう時は少々問題があったが、概ねノープロブレムな現状。少し振り返ってみっかw

・めぐみんの場合

「ほらやつさと起きろよめぐみん。」

そう言つて地面で気絶しているロリイタをゲシゲシと足蹴にするカズマ。扱いがひどえ…。

「んー、はっ！私生きてる！それにカズマ無事だったんですね！あの筋肉たるまの巨人にとつくにミンチにされてると思つてましたよ！」

「…お前、後ろ見てみる。」

「何つて、ギヤアアアア！何でまだいるんですか!？」

「お前アルケイデスさんに失礼だろ!?爆裂魔法食らわせといて！ほら謝れ！」

「え!?!この見た目ですよ!?!どう見たつてやべえモンスターじゃないですか！人間とかありえないですよ！」

「お前本つ当に失礼なやつだな！ああすみませんアルケイデスさん！こいつはちよつと、いやかなり頭がおかしいだけなんで許してやつてくださいー！」

「頭がおかしいつて何ですかカズマ！ええ？私のどこが頭おかしいか言つてみてくださいよ！」

「全部だよ!?!その妙にチンピラ臭い態度とか厨二臭え言動とか頭のおかしい行動とか！」

「つ!?!よくも言つてくれましたねカズマ！いいでしょう！その喧嘩買つてやりますよ!?!」

「ハッ！爆裂魔法撃つて身動き取れないくせに何を言っているのかなこのロリは！」

「ロリつ!?!ふふふカズマ。あなたは言つてはいけない事を言つてしまいましたね！」

「取り敢えずさつさと頭下げろ！」

おう…。カズマが少女の頭を無理やりこちらに下げさせている。

「ほら謝れよ。」

「……………ごめんなさい。」

「ああん？よく聞こえねえぞ?..」

「うっさいですね！あなたは私のお母さんですか!?!」

「お前みてえガキなんていらねえよ！」

また話が脱線して騒ぎ出した二人。  
…ぐだぐだしてんなー(遠い目)

「おっほん！いよいよこの私が名乗りを上げる時が来ましたね！」  
「さっさとしろよ。ダクネス起こさなきゃいけないんだから。」  
「…：我が名はめぐみん！紅魔族随一の魔法の使い手にして、爆裂魔法を操りし者！」

『アルケイデスだ。』

「おいめぐみん、無理してわざわざ立つなよ。膝ガックガクだぞ？」  
「これには様式美と言うものがあつてですね…、あっカズマ！ちよつとその膝ツンツンすんのやめてもらえませんか!？」

「だが断る。」

「なあああああつ！」

あ、めぐみんが地面に倒れた。…にしてもカズマいい笑顔してたなあー。

「それじゃ次行きましょうか。」

お、おう…。

・ダクネスの場合

「おいダクネス、起きろよ。」

カズマが声をかけるも女騎士はピクリとも動かない。

「起きなきゃひつでえ事すつぞ?」

女騎士は動かない…ってん?何か息荒くなつてね?

カズマは頭をガシガシと掻きむしりながら、

「今起きたらものすんごく酷い目に合うぞ?もうお前が泣き叫んでも止めな…」

「そのものすんごく酷い事とは何だカズマ!詳しく聞かせろ!そして私に実行しろ!」

「やっばお前起きてたじゃねえかああああ!」

「それでそのものすんごく酷い事とは何なんだ!」

うわあ。めっさ興奮してんじゃん。もしかして…

「誰がお前にそんな事するかよ!嘘に決まってるだろ馬鹿!」

「なっ!?嘘だったのか!?!…上げて落とすタイプか。くうん!」  
あ、こいつドMだ(確信)。

「ほらお前勘違いして斬りかかったんだから謝れよ。」

「仲間の危機だと勘違いしたとはいえすまなかつた。許されるとは思っていないがどうか謝罪を受け取ってほしい。」

そう言って頭を下げる女騎士。

『何、あれはそう取られてもおかしくない状況だった。』  
ペラッ。

『だから気に病むな。謝罪を受け取ろう。』

「すまないな。助かる。」

(めぐみんと違ってえらくすんなり謝ったな…?てかやつぱリアル  
ケイデスさんいい人すぎる!人って見かけによらないんだなあ…)

「ところで貴公を見込んで頼みたい事があるのだが…?」

『何だ?』

(猛烈に嫌な予感…!)

「私をそのたくましい腕で殴ってくれ!」

「はいダウトオオオオ!」

「何だカズマ?今は邪魔してほしくないのだが?」

「何だカズマじゃねえよ!今までの流れが台無しだよ!ぶち壊しだ  
よ!」

「しかし…あの頭から突き抜けて行くような痛…、快感が忘れられ  
ないんだ!デコピンであれだけなら殴られたら私は一体…くうッ  
!」

「なぜ言い直した!今なんで言い直したんだよ!」

「頼む!後生だから私を殴ってくれえええ!」

ええ…。ガチモンのやべえ変態やつじゃねえか…。

「先程は少し取り乱してすまなかつたな。私はダクネスと言う。」  
(少し…?)

『アルケイデスだ』

「そうか。よろしく頼む。…やはり軽くデコピンだけでも…?」

「却下だこの変態クルセイダーが!」

「はあん!」

回想終了。うん、なんつーか全員キャラ濃すぎだろw

「アルケイデスさんってアクセルに何しに行くんですか? あっ、答えられたらでいいんですけど?」

うーん何と答えたものかw? カズマたちは冒険者をやっていると言っていたな…。よしそれで行こう!

『冒険者登録をするため。』

「え!? アルケイデスさん冒険者登録してなかったんですか!」

「本当か!?! あの強さで冒険者登録をしていなかったとはな…。てつきり私もどこぞの高ランク冒険者かと思っていたが、確かにそのような人物など聞いた事なかったな…。」

「それでどうしてそのカンペなんて使ってるんですか?」

と、一行たちが気になりながらも聞かなかった事をめぐみんが聞き、

「それぞれ! 私も疑問に思ってたの!」

アクアがそれに便乗した。

やっべw なんて答えようw 確かに普通に話せばいいもんなw 慌てているところをカズマが、

「お前らそんな地雷わざわざ踏みに行くなって! ほら本人も訳アリ感出してんじゃない! 気にしないでくださいアルケイデスさん!」

フオローしてくれた。いやー助かったわwマジで。

「ところであなたから神性みたいな感じるんですけどお父様かお母様どっちか神なの?」

「だから聞くなって言ってるんだろおがおあああ!」

そんな事を駄弁りながら進んで、

「あ、見えてきましたよ。」

アクセルの街に到着した。





## 冒険者登録

「だあかあら！俺はこのアクセルを裏で牛耳ってるスゲえ奴なんだぞ！それをあの衛兵どもは…」

ドンツと乱暴にクリムゾンピア・クリムゾンネロイド、いわゆるシユワシユワが入っているジヨツキをテーブルに叩きつける。

「おいダスト。いい加減昼間っからそんなに飲むのやめろって。」

「るっせえ！飲まなきゃやってらんねえよ！」

グビグビと飲むダスト。やがて空になり、

「おーい！もう一杯追加だ！」

その様子をパーティーメンバーは呆れて見ていた。

「おいおい、ダストまたずいぶんと荒れてんな？あいつ今回は何やらかしたんだ？」

「ああ、本屋で立ち読みしてた女のスカートの中を這いつくばって見ていたら、気付かれてそのままハイヒールで頭踏まれてから衛兵に突き出されたらしいぞ。」

「あいつも懲りねえよな…。」

「つたく、俺ほど謙虚に慎ましく生きてるヤツは中々いねえのによお！酒と肉と女と金！それさえあれば何もいらねえ！」

ダストには是非とも一度、辞書で謙虚と慎ましいの意味を繰ってほしい。周囲がそう思っていると、突然何かに気が付いたように一人の冒険者が入り口を凝視する。すると他の人もつられて首を動かし、そのまま動かなくなった。

「つたつく何だ？お前ら俺の話聞いてんのかあ！さつきから黙りやがってよお！一体何見て…っ!？」

(何だよアレっ!?)

周囲の喧騒もいつの間にか止んでいたので首を入り口付近に向けると、そこには鉛色の巨人がいた。

そのまさに鎧のように発達した筋肉は見る者を圧倒させ、右手にはその体躯に釣り合った、常人では振るうことさえ叶わないだろう大きさの斧剣を持ち、全身から容易にわかるほどの強者の風格が立ち上っていた。そしてベツトリと斧剣と身体の至るところに血が付いていた

巨人が一步進む。それだけの動作なのにまるでぽっかりと大きく口を開けた、絶対的な捕食者が近づいてきたように感じられた。

周囲の音が一切存在しなくなったかのように感じられる中を、巨人は床に大きな悲鳴をあげさせながら受け付けへと進んで行く。

そして受け付けカウンターの前で止まった。

「ぼ、冒険者ギルドによ、ようこそ…！きよ、今日はどうされまひたか…？」

職業意識からか、声を何とか捻り出す受け付け嬢ルナ。

その巨人はしばらく動かずに停止していたが、そして…

くくく

「あつ、あれが冒険者ギルドです！」

うつひよw とうとうやって来ましたよ冒険者ギルド！ 中世っ

ぽい建物とか、エルフ耳とか、もういかにもRPGに出てきそうな服着た人とか歩いてっし、もう街の中だけで興奮やべえw

「冒険者登録は受け付けでするんですが…」

『わかった。』

よし少年たちよ！行ってくるでw

「カズマさん、カズマさん。登録するとき手数料かかるんだけどアルちゃんお金持ってそうに見える？」

「いや俺今から説明しようと思っ…ってアルちゃんって何だよ!!めっちゃ気安いなお前!!」

「えー、だって何かシンパシー感じるしー？こう、神的オーラっていうか？んー、人と神のハーフ的な？」

「何ですかそのかっこいい設定!!あの筋肉たるまには勿体無いです

！」

「黙れめぐみん。てか筋肉だるまなんて絶対にアルケイデスさんに言うなよ？まあ目が合うだけで気絶するようなビビりならそんな度胸ねえか。」

「プークスクス！どう考えても漏らしてた男の言うセリフじゃないわね！」

「なっ！」

「えっ、カズマ漏らしてたんですか!? どうりで変な匂いするなって思ってたんです！バッチい！下ろしてくださいっ！」

「も、漏らしてないし！てか背中で暴れるな！」

「漏らす程のプレッシャーとは…くうっ、私も味わってみたい！そしてゴミのような目つきで見られたい！」

おーおー。何か入ってたらめっさ見られてるんですがw えっ何でこんなに俺ちゃん注目されてんの？（困惑）

ハッ！…なるほど、そうか…。

俺ちゃん上半身裸だからかw

そっかw いきなり上半身裸で筋肉ムツキムキの男が来たらそりやビビるよなw ↑違うそうじゃない

やっべw やばいやっつて思われてつかもw ↑別の意味で思われている

取り敢えず受け付けのお姉さんのところに行きますかw

受け付けカウンターまで来たんだが、このお姉さん大っきいw（どこがとは言わない）

やっべ、めっちゃはみ出そうじゃんw 俺ちゃんの大っきなお手手で隠してあげましょうかw（ゲス顔）

「ぼ、冒険者ギルドによ、ようこそ…！きよ、今日はどうぞされまひたか…？」

おっと、胸を見ていたことがバレちゃいましたかw 声が上がってらっしやるw てかあなた噛みまみたよね？ ごほん！まあ取り敢

えず冒険者登録しますか。自分は立派な紳士だからネ！

よし、かきかきつと。このペンつてマジでどうなつてんだらうな？

『冒険者になりたい』

「そ、そうですか…。えーつと、では最初に登録手数料がかかりますが…？」

……は？金取んの？

プギヤwww 俺ちゃん無一文なんですけどw

詰んでるw え、どしよ？カズマたちに借りるのもいいけど、話聞いてたら毎日が苦しそうだしなー。馬小屋で寝るつてw

おつ、あそこに酒持つてる冒険者(仮)いんなー。こんな昼間から酒飲むとかいい身分だなおい。羨ましい！まあそんな訳でお金に余裕あるつしよ。頼みにいきますかw

「おいあの大きいやつこつちに来るぞー！」

「もう威圧感やばすぎでしょ!？」

「おいキース！リーン！テイラー！待てよ!？」

ダスト以外は立っていたためそくさと逃げる事が出来たが、座っていたダストは一人取り残される。

「つ!?!何だよ!」

鉛色の巨人はダストのすぐ側に立つ。近くで見ると、その巨体はより大きく感じた。

その巨人はどこからともなくカンペを取り出し、

『冒険者登録用の金』

ペラっ。

『貸してくれないだろうか?』

とめくつた。

「は、はあ？何でこの俺がてめえに金貸さなきゃなんねえんだよ?」  
ビビっていたが、持ち前の反骨精神で何とか取り直す。

その瞬間、巨人から放たれるプレッシャーが一気に重くなった。

身体がガタガタ震える。どう足掻こうが勝てない。無様に為す術もなく殺される。そんな思いが湧き上がる。

そして生存本能が囁く。今すぐ逃げろ。泣いて許しを乞えと。

巨人が顔を近づける。赤と金の瞳と目が合う。それだけで心臓がもう爆発してしまうんじゃないかと思うほど早鐘を打つ。

一体どれくらいの時間が経ったのだろうか。まだほんの数秒かもしれないし、一時間経ったのかもしれない。極度の緊張感に晒されて、時間の感覚がわからない。もう限界だった。

「っこれやるよー」

そう言っって金が入った袋を投げ出す。

『こんなにもらっつていいのか?』

「いいよー」

早く自分の前からいなくなっつてほしい。その一心で叫ぶ。

『感謝する』

そして目の前から巨人<sup>絶望</sup>は消える。

(助かった…!)

助かったという安堵により、一気に緊張感が緩んだダストは、

「ブリュっ!」

白目を? いて失禁をしながら脱糞をして床に倒れた。

ハイ! そのお兄さん! この恵まれない俺ちゃんにマネー貸してくれない?!

「っ!? 何だよー」

おっと書かなきゃわかんないよねー。よしこれでよしと。

『冒険者登録用の金』

ペラっ

『貸してくれないだろうか?』

「は、はあ? 何でこの俺がてめえに金貸さなきゃなんねんだよ?」  
カッチーン。今のはちよつとさすがの俺ちゃんも傷付いちやいましたわー。もつと言いつてあるでしょ? まあ確かに金貸す理由とかないけない?!

もう思わず眉間に皺が寄っちゃたよー。ここはもう少し粘ってお

願いでみますかね？ほらこっちも人をお願いするときは目合わせなきや、誠意足りてないしね。

ジツと見てみる。ねえーお願いい。お金貸してよおー。

何か急に汗かき始めたなー。どうしたんだろ？どっか具合悪いかな？このどこかチンピラじみたお兄さん。

「っこれやるよー」

おっ、何か袋投げてきた。キャッチしたらチャリンって小気味いい音したしお金めっちゃ詰まってんじゃんw 結構入ってんだけどしこんなにもらつていいのかな？一応聞こうつと。

『こんなにもらつていいのかな？』

「いいよー」

いやー助かったなー。このお兄さんには本当に感謝しないと。ありがたやーありがたやー。

『感謝する』

さーてやつと冒険者登録だw

「ブリュッー！」

何か音したから後ろ振り返ったら、お兄さんが白目剥きながら股間を濡らして、ケツの方から嫌な音を立てて床に倒れていた。

……よっぽどトイレに行きたかったんだろー（震え声）

「うわっ！ダストのやつ、失禁しながらクソ漏らしてやがる！」

「きったね！てか臭っ！おい誰かクリー清浄魔法ンかけてやれよ！」

「嫌よー！近付きたくないし！」

その後、ダストは意識を取り戻すまでそのまま放置された。

「よかったわねカズマ！漏れ友が増えたわよ！」

「よかったですねカズマ。あつ、匂い移るんで半径3メートル以内に近づかないでください。」

「くっそおおおおお！」

『これで足りるか？』

「はい…。」

お姉さんが目を合わせようとしなのは俺ちゃんの気のせいなの

かな?かな?

「それでは改めて説明を。各冒険者には職業というものがございませぬ。そしてこれが登録カード。冒険者がどれだけ討伐したかも記録されます。」

やっと調子が出てきたのか声に震えが無くなって来たお姉さん。にしてもそのカード便利じゃね?マジでどういう仕組み?

「レベルが上がるとスキルを覚えるためのポイントが与えられるので、頑張ってレベル上げてくださいね!」

溢れ出るRPG感ww ジョブ選んだらそのその職業のスキルツリーが開放されてくって感じねw おけまるw

「それではこちらの水晶に手をかざしてください。」

へー、ステータスとか出てくるんですね分かります。

にしても注目されてんなw 背中にビンビン視線を感じるぞいw

おー、手かざしたら水晶から光が出てカードに何か刻まれてくすっげえw

「これでステータスが分かりますのでその数値でなりたい職業を決めてくださいね。」

「はいありがとうございます。えっと…アルケイデスさんですね。はああああ!?知力だけ他より劣っていますますがその他の全パラメータが高ランク冒険者と同等、いやそれ以上ですよ!?!特に筋力の数値が桁違いです!こんなステータス見たことありませんよ!規格外ですよ!?!」

はへー、やっぱバーサーカーはスゲえー。(小並感)

「魔法使い職は無理ですがそれ以外だと何でもなれますよ!?!」

「クルセイダーやソードマスター、アークプリーストなど上級職も全て開放されますし!?!」

周囲からざわめきが響く。んーキモチいですわw

でもお姉さん?これって盛大な個人情報暴露ですよね?(真顔)

「うー、いくらアルちゃんだって女神である私の初期ステータスを超えているなんて許せないわ!」

「そうですよ!というか魔法使い系職になれないなんてやっぱり脳



筋じゃないですか!？」

「お前らマジで黙ってるおおおお！」

「それで何の職業を選びますか！」

お姉さん興奮してんなー。あれだわ。興奮してる人見てたら逆に冷めるってやつだわ。てか職業なんてとつくにもう決めてっし。

『狂戦士で』

お！お姉さんの顔が引き攣ったぞい？

「狂戦士ですか？？狂戦士は確かに攻撃力はソードマスターに並び、それ以上の火力もスキル狂化の使用によつては出せますが…。攻撃には打たれ弱くてその…攻撃が過激というか味方も巻き込むというか…。ソードマスターはどうでしょうか!?狂戦士と同じく攻撃特化ですよ！」

『狂戦士で』

「えっ！なら…」

狂戦士とは確かに攻撃力はトップクラスの攻撃力を誇っているが、狂化スキルを使うと味方を巻き込んでも一切無視し、また防御系スキルも存在せず、突撃するだけが脳で協調性皆無であるため、パーティーに余り誘われない不遇職である。そのためルナは説得を試みていたが、無言で『狂戦士で』と書かれたカンペを持ち続けているので諦めた。

よし！ひたすら『狂戦士で』ってカンペで意思表示して、何とか違う職を勧め続けるお姉さん振り切って狂戦士を確保したでw

「ええー…狂戦士か…。」

「あんなものの攻撃に巻き込まれたら死ぬぞ…？」

「狂戦士はちよつとね…。」

「ごほん！それでは冒険者ギルドによろこそアルケイデス様、スタッフ一同心より今後の活躍に期待しております！」

まあもうすつこと終わったし、街の中適当に歩いてみつかw 幸い金はあるしw おっぱ…おっと、お姉さんありがとねw 明日からクエスト受けに行くよw

嵐のようにやって来た鉛色をした巨人は堂々と入り口から出ていった。そして後に頭のおかしい狂戦士バースカーと呼ばれる男の冒険が始まる…かもしれない。

~~~~~

その夜…

まさか自分が寝れるベッドなくて馬小屋に泊まるとか草w はよ寝よつとw

「はあー、今日は疲れたなー。」

「ねえカズマ！アルちゃん私達のパーティーに誘わない？絶対に活躍してくれるわよ！」

「え…。まあアルケイデスさん確かに強いし、1回だけ仮になら…」

（ん…？何かいつもの俺らの寝てるとこの横に黒くて大きいもんが…ってアルケイデスさんじゃん!?めっちゃ爆睡してるし！）

「あらアルちゃんじゃない！ちようどいいわ！ねえアルちゃん、この水の女神たるアクアがいる私達のパーティーに入らないかしら！」

「おまつーアルケイデスさん寝てるんだから起こすなって…！」

「んもー。アルちゃんなかなか起きないわね。ほら頬つんつーん。」
（あああああああ！）

アクアが屈んで頬をツンツンしようとした瞬間バースカーは寝返りをし、アクアの顔面目がけて裏拳が飛んで、食らったアクアは吹っ飛んでいった。

「アクアあああああ！」

「おいこらさつきからうっせえぞ！」

「すんません！」

■■■■■■■■■■ーZZZZ

→騒ぎに対して一切起きる気配がなく爆睡